



海を越えた就職活動

鎌谷 朝之*

Job Hunting Overseas

Key Words : University of California Irvine, Career Forum, Internat, Visa Support

1998年9月、私のアメリカ留学生活も5年目に入った。カリフォルニアの日差しは1年を通して強く、季節を感じさせないので、気がついたら時がたっていたという感じである。

4年前、阪大大学院で村井先生のもとに学んでいた私は、一大決心をして学校を休学し、ここカリフォルニア大学アーバイン校に大学院生として入り直したのである。阪大の学籍は2年後に抹消され、何としてでもここで学位をとらなければならない状況になった。ネイティブのアメリカ人とのやりとりは熾烈を極め、一時は帰国も考えたが、新しい「ボス」となったオーヴァーマン先生の暖かいご指導と多くの方々の励ましに支えられ、研究成果もようやく出るようになり、何とか5年目を迎えるに至ったのである。このころには生活にも慣れ、やや惰性に近い状態になっていたかもしれない。

さて、大学院のプログラムは通常5年で完結する。私の研究成果はあと1年もすれば何とか博士号をとれるくらいにまとまるだろう。しかし私にはもう一つ、大事な問題があった。将来どうするかが全く決まっていないのである。

考えられる選択肢は4つあった。アメリカに残って大学で研究を続けるまたは就職する、もしくは日本に帰って大学（または研究機関）で研究を続けるもしくは就職する。私はこの中でとりあえず、「ア

メリカまたは日本で就職する」という目標を立てて情報を集めてみることにした。

まず、アメリカでの就職だが、こちらの活動はいたって簡単だった。我々が何も言わなくても、企業の方が面接官を学校に差し向けてくれるのである。当時未曾有の好景気に沸いていたアメリカでは求人も多く、我がカリフォルニア大学アーバイン校にも大小あわせて20に及ぶ企業がやってきた。私も履歴書を用意し、ほとんどの方々と会って自分の研究成果を簡単に説明した。そして相手の返事は決まって「また近いうちに連絡します」だった。

しかし、それから教週間の間に来たのは「2次面接の案内」などではなく、簡単な「お断り」の手紙の山。理由は簡単。アメリカの企業では他の企業での経験が豊富にある人などよほど戦力になると判断されたのではない限り、ビザのサポートを必要とする外国人には目を向けてくれないからである。

では日本の方はというと、日米の間に横たわる「太平洋」がじゃまになる。そもそも日本の理科系学生に対する求人は学校・学科単位で行われており、採用活動が公にされることがほとんどない。こんな状態では日本国内でも求人情報を見つけるのが困難なのに、海外にいてはさっぱりわからないという状態になる。それに追い打ちをかけるのが「超氷河期」という名前までついた就職難。さすがの楽観主義者の私も、どこから手をつけてよいのやらわからない状態だった。

そのような私を含めた日本人学生にとって「命綱」ともいえる就職情報ソースが2種類あった。

1つは年に2回ほど開かれている「就職セミナー」である。アメリカに日系の就職斡旋業者が2社あり、彼らがアメリカで開催するセミナーには多くの日本企業が窓口を出すのである。太平洋を越えなくても就職活動ができるということで、私も何度か参加し

* Asayuki KAMATANI
1971年3月29日生
1999年Department of Chemistry,
University of California, Irvine
大学院化学科修士
現在、万有製薬(株)、技術開発研究所・合成技術研究所・プロセス化学研究室, Ph. D. in Chemistry, 有機金属化学, 有機合成化学
TEL (0564)51-5668
FAX (0564)51-7086
E-Mail kamtnias@banyu.co.jp



たが、学生の参加費は無料である上、交通費の一部も補助されるということで大変ありがたいセミナーだった。しかし、企業側の参加は文化系の業種またはコンピューター関連に偏っており、私のような「有機化学の博士号」が立ち寄れるようなブースはほんの5つ程度、といったところであったのが残念としか言いようがない。

もう1つは「インターネット」である。私が渡米して2年ほどたってから爆発的に普及したこのすばらしいメディアによって、求職状況をホームページを通してチェックすることができるようになったのである。唯一のハードルは「自分のパソコンで日本語が読めるようにする」ということだが、私も試行錯誤の末、なんとかメールともども可能になった。メールにしても時差を気にせず一瞬にして相手に送ることができるということで、アメリカに住む日本人学生にとっては「救世主」とも言ってもいい存在となった。しかし、私のような理科系にとって不幸なことに、理科系企業でホームページを通して採用活動を活発に行おうとする動きが見られない。

結局この2つの「命綱」は就職探しという意味ではあまり成果をあげることができず、数ヶ月を無駄にすることとなってしまった。しかし私にはまだ望みがあった。先に述べた「学校内での面接」に訪れた企業のうちの一部は、日本にも研究所を持っていたのである。具体的にはバイエル、ファイザー、ロシュ、メルクで、これらの企業の面接官には「日本の研究所に就職したい」という希望を伝えたのである。

海の向こうとのコンタクトということで、時間がかかるのはやむを得ない。結局、この面接を受けてから日本より連絡が来るまで4ヶ月近くかかってしまった。

メルクの傘下にある日本の製薬会社、万有製薬より内定をもらったのは1999年の5月。就職活動を始めて半年以上が経過しており、公聴会をわずか2ヶ月前に控えての決定である。

それから2年あまりの月日が流れた。私は今、メルクとの技術交流を中心とした英語の絡む業務に忙殺される毎日である。時折5年間のアメリカ生活を振り返り、あのときの苦勞が報われているなど感じる。海外に出ると日本のシステムからははずれるため、将来などを不安に思う向きもあるかもしれないが、国内ではとうてい望めない豊かな経験を積むことができるし、日本に戻ることは決して不可能ではない。学生としてであれ、研究員としてであれ、是非挑戦していただきたいと思っている。

